

伝文

日本口承文芸学会会報
第3号 1988年9月

発行 日本口承文芸学会
〒160 東京都新宿区西新宿8-4-5
(財)ラポ国際交流センター気付
電話 03-367-2431 内線248

学会への提言

藤本英夫

小学校にあがる前の、まだ幼少のころ、私は、祖母から、〈お話〉を聞くのが楽しみだった。祖母のヒザによりかかりながら一年よりのニオイがしていたような気がする一の話は、私の心に豊饒な夢を育ててくれた。

祖母の話は、「海」にかかるものが多かった。家業が海運業だったからだろう。「海ぼうず」や「かっぱ」など、たいいてい、子供心に、少しオーバーにいえば恐怖感をさそうような内容だった。龍宮城の乙姫さんが登場してくるような話ではなく、聞いたあと、一人でトイレにいくにいくのがこわかったり、布団に入って上をみると、天井の板についている節目が、海ぼうずの片ちんばな目

にみえてきて、思わず布団をかぶったもの。それでも、翌日には、またその話を聞きたくなる。

こんな話が口承文芸の領域に入るかどうかは分からないが、このころ、私は、よく、そんな話のあれこれを思いだす。そして、きっと、あちこちにある、短いこの種の話が忘れられていくのが惜しいような気がするのである。

いますぐ活字にする必要はないけれども、海の話、川などを地域ごとにシリーズで書き留める—自分一人で、自分のまわりをやればいいのかろうけれど、この学会で音頭をとってくれと、怠け心をふるいたたせてくれて、ありがたい。

(北海道札幌市)

第3回研究例会「うたとかたり」

宮廻和男

(例会報告) 87年度第3回研究例会は、88年2月20日に開催され、報告者はト田隆嗣氏と小島美子氏、司会は川田順造氏である。ジャンルとしての「うた」は口承文芸の中でも重要な位置を占めるが、本学会ではかつて機関誌第5号(1982)で共通テーマとして「昔話と歌謡」が組まれたほかは、あまり焦点を与えられなかった。今回の研究例会はむしろパフォーマンスの側面から「うたとかたり」を脱構築してその異相を解き明そうとする、野心的な試みである。

ト田報告は、「うたとかたりにおける定形化と個別化—マレーシャ・ブナンの事例」。「うた」と「かたり」において定形化と個別化はどのように関連しているのか、という問題設定に立ち、ブ

ナン島ではかたりの定形化とうたの個別化はみられるが、ブナン文化の観点からは二者は同等であり、区別の必然性はないと論じる。

小島報告は、「うたとかたりのあいだ—日本の場合」と題して、ジャンル論的分析から実際の競馬中継のアナウンサーのかたりの分析まで含めた広い視野に立つ検討を行う。うたの語り物化の傾向、語り物のうたの要素の導入傾向はともに大きく、日本の場合はうたとかたりの区別はしにくい状況にあると論じる。

報告後、フロアから多岐に渡る質疑、事例紹介があり、今後の研究の方向性を示唆する論議がなされた。

(茨城県土浦市)

(コメント) 第3回研究会「うたとかたり」は、小島美子氏による「うたとかたりのあいだ—日本の場合」と、ト田隆嗣氏による「うたとかたりにおける定型化と個別化—マレーシア・プナンの事例」という二つの報告をめぐって行なわれた。

比較音楽学の父といわれるC.ザックスのPathogenic (感情起源的)とLogogenic (言語起源的)という2系統、それに対応する故小泉文夫氏の「追分様式」と「八木節様式」、起源は不明とされる「歌いもの」「語りもの」という用語、そして今回のテーマ「うた」と「かたり」。イントネーションや音階等の音楽的な諸要素から両者を概念的に分けることは比較的容易だとしながらも、小島氏は箏曲の事例などを挙げて、日本の音楽芸能における両者が錯綜した特異な表現様式の展開について具体的に述べられた。ト田氏の報告の場合は、「かたり」のなかに「ぼやきことば」という概念

を登場させて、様式が多様化する前の、むしろ表現目的と手段の選択段階に視点を向けた事例だと言える。ト田氏はひき続き口承文芸学会第12回研究大会でも報告をなさったが、プナン文化の、声も含めて「出すこと」への重視という、文化人類学者としての解釈が新しかった。

このように両氏の報告は種々の点で対照的であり、示唆に豊んだ組み合わせであった。近年特に注目されてきている「語り」であるが、そこには明確な実体があるわけではなく、私たちの“思入れ”の産物である部分も大きいようだ。この巨大化した日本語の「語り」を表わす外国語は恐らく無いであろう。筆者自身も「かたり」ということばに、うっとりとしてしまいがちではあるが、反省も込めて最近次のような構図を考えている。

(愛知県知多郡)



(1988, Suzuki)

日本口承文芸学会第6回理事選挙報

今年度末に第6回選挙(昭和64, 65年度担当理事選挙)を行います。本学会選挙規定第5条により、選挙権および被選挙権を有する方は、選挙管理委員会の定める期日までに該当年度の会費を完納した会員です。今回は来年1月末日までに会費完納済みの会員を有資格者とします。会費滞納者、今年度会費未納者ご注意ください。なお、有資格者には後日選挙書類を送付しますので同封の規約に従って投票してください。昭和64年2月に実施予定です。

(選挙管理委員会 大島広志)

昭和64年度日本口承文芸学会大会予告

とき: 昭和64年6月3日(土), 4日(日)

ところ: 山形県赤湯温泉

研究発表者の募集は、今年末に会員に連絡しま

す。ふるってご応募ください。

第9回国際口承文芸学会大会案内

口承文芸研究者の世界的な学会である、国際口承文芸学会(ISFNR; 会長ラウリ・ホンコ博士 フィンランド・トゥルク大学教授)の大会は5年に一回開催され、1989年6月10日から18日まで、ハンガリーのブダペストで行われる予定です。大会テーマは“Folk Narrative and Cultural Identity”で、さらに5つのトピックが用意されています。本学会からも、多数の参加が望まれています。大会組織委員会の連絡先:

9th ISFNR Congress
ELTE BTK Folklore Tanszek
Pesti Barnabas u. 1
pf. 107 H-1364
BUDAPEST, HUNGARY

〈仲間たち〉

中国民話の会（東京）

飯倉照平

中国民話の会は、もともと東京都立大学の村松一弥さんのもとで、中国の民間文学（口承文芸）を勉強していた者たちが、1967年に作った研究会である。当初の「民間文学研究会」が、1974年に現在の会名に改称された。

村松さんを中心として、『中国の民話』上下2冊（毎日新聞社）の共訳を1972年に刊行し、さらに平凡社の東洋文庫から1973～76年に「中国の口承文芸」シリーズとして、『義和団民話集』『苗族民話集』『山東民話集』『北京の伝説』などを出したころが、会員の共同作業がいちばんさかんな時期であった。

1980年以降、中国との交流や往来が可能になり、未開放地区を訪問できる窓口もなったため、とくに中国の少数民族に関心をもつ人たちが多く参加するようになった。しかし、近年では往来の窓口も多くなったため、会としての中国訪問はしばらく休んでいる。

現在は年10回ほどの月例会を開き、中国に滞在した人や調査に行った人などの話を聞いたり、来日した中国人研究者を招いたりしている。会員の総数は60余人だが、月例会の出席者は毎回10～20人程度で、かならずしも専門家だけの集りというわけではないので、素朴な疑問をぶつけあってなごやかにやっている。また地方の会員や会外の人々との交流の場として、20ページほどの通信を年4回出している。

村松さんの健康状態がすぐれないため、昨年から伊藤清司さんに会長になっていただいた。それと前後して会の実質的な推進役であった加藤千代さんが愛媛大に移った。一方、民俗学や民族学関係では、別に「中国民俗研究会」や「仙人の会」、あるいは「比較民俗学会」などに加わって活動している会員も多い。本会も、中国の口承文芸研究という原点に立ち返って、着実な努力を積みかさねていきたいと思っている。

（連絡先：〒152 東京都目黒区八雲1-1-1
東京都立大学中国文学研究室内 中国民話の会）

〈こえ〉

「かしゃんぼ」発刊三年目

和田寛

河童専門のささやかな個人誌「かしゃんぼ」を発刊して3年目になった。この雑誌は河童伝承を本格的に集めはじめて20年を超えた時点で創刊したのだから、思えば河童との付き合いは長い。つい最近出したばかりの同誌10号は、河童に関する行事を特集した。北は北海道から南は九州まで、項目数にして約120、1月から12月まで毎月どこかで何等かの行事が行われている。収録したのは河童行事のほんの一部にしかすぎないが、これだけでも、如何に多くの行事が河童とかわりを持ち、我々の祖先が如何に「水」を畏怖し、敬愛の念を抱いてきたかがわかる。

御存じのとおり「カシャンボ」は、南方熊楠によって「熊野地方にカシャンボの話盛んなり。これは西国にいわれる川太郎のごとく川に住み、夜廬に入りて牛馬を悩ますこと、欧州のフェアリー、またエルフに斉し。」と明治の終り頃から各種の雑誌で紹介されたものである。私は「かしゃんぼ」誌において、1年目は主として紀州の河童を、2年目は主として旅先で見聞きした河童の話を紹介してきたが、3年目は各地に伝わる河童の起源を紹介するとともに、あまりに根拠のない話なので今まで発表を控えてきた「仮説・熊野河童の起源」を掲載する予定である。

熊本県の伝説では、千五・六百年前に「九千坊」という優れた河童のリーダーが古代中国から河童の大群を率いて渡来し、球磨川河口の八代の地に上陸、ここから新しい文化を広げていったとしているが、私の仮説は、それより数百年も前に熊野の地に河童族が渡来していたとするものである。もとより荒唐無稽な説であるため賛同者は期待していないが、はたして何人の方に面白いと思っただけだろうか。

（和歌山県和歌山市）

計報 本学会員、国立歴史民俗学博物館教授坪井洋文氏。本年6月永眠。ご冥福をお祈りします。

新刊リスト

- 説話の始原・変容(説話・伝承学 88) 説話・伝承学会 桜楓社 88. 4
 因伯昔ばなし(第14集) 鳥取民話研究会(鳥取市栗谷町26 鷲見方) 88. 5
 語りの世界(7) 語り手たちの会(東京都世田谷区給田4-28-1-402 杉浦方) 88. 5
 昔話—研究と資料—(16)(昔話の比較) 昔話研究懇話会 三弥井書店 88. 7
 民話の手帳(35,36) 日本民話の会編集 国土社 88. 4/7(寄贈)
 民話と文学(20)(語られた現代) 民話と文学の会 88. 9(寄贈)
 聲 川田順造 筑摩書房 88. 2
 昔話の死と誕生 松居直 88. 4
 くつわの音がざざめいて 山本吉左右 平凡社 88. 8
 みちのくの語部 武田正 山形民話の会 88. 5
 昔話と文学 野村滋 白水社 88. 5(寄贈)
 本の話(国文学研究資料館講演集9) 国文学研究資料館 88. 3(寄贈)
 国際日本文学研究集會會議録(第11回) 国文学研究資料館 88. 3(寄贈)
 口頭伝承の比較研究(4) 川田順造・野村純一編 弘文堂 88. 3
 昭和62年度共同研究報告書 国文学研究資料館 88. 6(寄贈)
 世間話関係文献目録 世間話研究会(土浦市荒川沖東1-6-24-101 宮廻和男受付) 88. 3(寄贈)
 とんと昔あったとさ(第1集) 東京テレホン放送編 東武よみうり新聞社 86. 7(寄贈)
 波多野ヨスミ女昔話集 佐久間惇一(新発田市諏訪町2-2-1) 88. 2(寄贈)
 郡山の伝え語り 郡山市教育委員会 88. 2
 宮城県の民話—民話伝承調査報告書— 宮城県教育委員会 88. 3
 フランスの昔話 新倉朗子訳 大修館 88. 5
 三人兄弟と巨人(ドイツ語圏の昔話) 寺岡寿子訳 小峰書店 88. 6(寄贈)
 世界の民話(中央アフリカ) 寺岡寿子訳 ぎょうせい 88. 6(寄贈)
 うできき4人きょうだい(グリム童話) 寺岡寿子訳 88. 6(寄贈)
 Proceedings of the International Symposium on B. Pilsudski's Phonographic Records
 and the Ainu Culture 1985 北海道大学 85. 9(寄贈)
 知里幸恵ノート(アイヌ民俗文化財口承文芸シリーズV) 北海道教育委員会 86. 3(寄贈)
 久保寺逸彦ノート(アイヌ民俗文化財口承文芸シリーズVI) 北海道教育委員会 87. 3(寄贈)
 久保寺逸彦ノート(アイヌ民俗文化財口承文芸シリーズVII) 北海道教育委員会 88. 3(寄贈)
 昭和61年度アイヌ衣服調査報告書(II) 北海道文化財保護協会 87. 3(寄贈)
 東西音楽交流学術調査報告V(インド東北部・ブータン民族音楽) 国立民族学博物館 藤井知昭他
 88. 3(寄贈)
 Die Sehnsucht nach dem dunklen Raum 福山大学教養部第7号抜刷 寺岡寿子 83. 3(寄贈)
 バンツターの民話 福山大学教養部第9号抜刷 寺岡寿子 85. 3(寄贈)
 グリム昔話における「森」の存在 福山大学教養部第11号抜刷 寺岡寿子 87. 3(寄贈)
 下久志のキョーダラ 徳之島郷土研究会報第13号抜刷 酒井正子 87. 12(寄贈)
 アイヌの口承文芸オйна 国立民族学博物館研究報告別冊5号抜刷 荻中美枝 87. 3(寄贈)
 (新刊に限らず、寄贈いただきました著作も掲載しております)

日本口承文芸学会への入会希望者は入会申込書をご請求ください。入会金1,000円、年会費4,000円。
 入会申込書請求・送金先：〒160 東京都新宿区西新宿8-4-5 (財)ラボ国際交流センター気付
 日本口承文芸学会事務局 (TEL.03-367-2431) 振替：東京8-44834
 The Society for Folk-Narrative Research of Japan, c/o Labo International Exchange
 Foundation, Labo-Center Bldg., 8-4-5 Nishishinjuku, Shinjuku, Tokyo 160, Japan.

口承文芸に関心のある方を広くご紹介ください